

氏 名	なか い あつ し 中 井 淳 史
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 494 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	日本中世土師器の研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 上 原 真 人 教 授 泉 拓 良 教 授 勝 山 清 次

論 文 内 容 の 要 旨

土師器とは低火度で焼成した素焼きの土器である。日本各地の中世遺跡から大量に出土するために、編年に最適な素材として注目され、各地で編年研究が行われてきたが、全国的視野に立った生産体制や用途に関する研究は、ほとんどなされていない。本論文においては、これを克服するため、全国的視野で中世土師器の様相を解明するとともに、その機能・用途や生産体制について考究した。

序章「本研究の課題と中世土器研究史」では、中世土器研究史を回顧し、その中における土師器研究の成果と問題点を整理した。中世土器研究が活発化したのは1980年代以降である。編年から出発した中世土器研究は、近年、流通論や商業論など、社会史的立場からの検討が深められ、文献史学との学際研究が模索されている。だが、土師器の流通圏は局地的な場合が多いため、このような中世土器研究の趨勢とやや距離があった。しかし、土師器研究においても、単なる編年素材ではなく、生産や消費に関わる諸問題の解明が不可欠である。なお、中世土師器には「土師質土器」「かわらけ」など、さまざまな呼称があって用語が統一されていない。序章では、各用語が成立した背景を研究史的に吟味し、「土師器」という呼称を採用する妥当性も論じた。

第Ⅰ部第一～四章では、本論文で採用した方法と立場について論じ、中世土師器の生産体制や器名について考察した。

序章で確認した課題のアプローチ方法を論じたのが、第一章「中世土師器研究の視点と方法」である。まず、既往の研究における問題点を整理した上で、生産者と消費者の両面から検討するのが有効と判断した。次に、京都の土師器を模倣した京都系土師器が各地で生産された事実に着目し、その模倣行為の具体的な分析を重視した。すなわち、模倣対象（京都産土師器）と模倣品（京都系土師器）との間のズレは、生産者が対象をどのように理解したのかを示すだけでなく、それを製品として許容した消費者の意識を知る手掛かりになる。模倣行為に注目すれば、生産者・消費者の両面から論点を提供できるのである。なお、中世土器研究を含む歴史考古学は、常に学際性という問題に直面してきた。文献史学の成果と、どのように対峙して議論を構築するかという問題である。よく見られる文献史学の成果に依拠した議論は、対等であるべき学際性を損なうもので、同意しがたい。本論文では、文献史料・考古資料をそれぞれ分析し、各成果の比較対照を基礎に議論を構築する立場をとる。

第二章「中世土師器工人のスケッチ」では、京都系土師器を生産し消費した中世末期の出雲東部地域をモデルケースとして、土師器の詳細な属性分析から生産者集団の抽出を試みた。消費者の要請で模倣されたとしても、模倣に際しての着眼点や実現の度合は、生産者の成果である。したがって、土師器自体に認められる形態や製作技術の振幅は、生産者集団の相違を反映する可能性が高い。その視点で、京都産土師器とのズレの様態から、中世末期出雲東部地域における土師器生産者集団数やその展開過程を検討した。その結果、7ないし8単位の生産集団が、領主である尼子氏の消長や松江城築城など、消費者側の変動に強く影響されつつ展開したことが明らかになった。土師器生産も、自給自足を目的に自己完結的に維持されていたわけではなく、社会・経済と密接に関わっていたのだ。

第三章「土器の名前」では、中世土師器の器名を考証した。「かわらけ」「三度入」などの土師器を指す呼称は知られてい

たが、それが実物の器形や法量と、どのように対応するのは十分に検討されていない。また、考証に際し、近世の故実書から中世の呼称を類推するなど、史料操作上の問題もあった。本章では、同時代史料の用例と京都産土師器を対比して、器名の確定をめざした。12～16世紀の土師器に関する名称を整理し、「大・小土器」、「赤・白土器」、「三度入」「五度入」などについて考古資料との対比案を提示するとともに、15世紀以降頻出する「度」単位の普及は京都周辺に限られていたこと、文化表象に京都と地方で大きな格差があったことを明らかにした。

第四章「文献史料にみえる土師器生産集団」では、文献史料から中世土師器生産の実像を追究した。南都土器座に関する史料から、粘土採取、生産（構成人員）、製品納入の実態を素描した。南都では給田の代償として製品を納入したが、京都深草では、正月や節句に際して納入するなど、儀礼的色彩が強く、販売者も存在した。座として組織された事例は南都以外には認められず、中世では京都のようなあり方が一般的だった可能性が高い。以上の事実から、粘土の共通性が必ずしも個別の生産者を判定する材料とはならないこと、家単位で生産したため、特定の製作技術が排他的に現われる場合には、それが生産者の相違を反映している可能性が高いことなど、考古資料を解釈する際に有益な判断材料となる特徴が指摘できた。

第Ⅱ部第五～八章では、中世土師器の機能・用途を考察した。儀礼に用い、一回限りで使い捨てるというのが、中世土師器に関する通説的理解であったが、土師器の機能・用途はこれだけにとどまるものではない。

第五・六章「献盃儀礼と土師器(1)(2)」では、従来の研究史を踏まえ、中世土師器を武家儀礼の儀器とする説を再検討した。第五章では、式三献など献盃儀礼の実態を文献史料から検討し、京都で成立した武家儀礼や酒宴が、多法量の土師器皿を必要としていたこと、同じ武家儀礼や酒宴が16世紀には各地に普及したことを示した。ところが、実際の考古資料においては、各地の京都系土師器は、京都で成立した多法量を満たしていない場合が多い。つまり、武家儀礼の地方導入時に重視されたのは所作や作法で、道具も含めた儀礼全体の再現は意図されていない。各地の京都系土師器の生産や多法量の採否は、武家儀礼の導入に際しての必須要件ではなく、その採否は当事者の選択の範囲内にあったと考えられる。

第六章では、16世紀における寺院や国人領主の献盃儀礼に際しての土師器使用法を検討することで、地方の京都系土師器の出現が、武家階層の事情のみで説明できないことを示した。土師器の使用をともなう献盃儀礼は、武家に限らず、様々な階層に普及していたのである。したがって、献盃儀礼を武家に過度に引きつけて、中世土師器を権威の表徴とみなす通説的理解は成立しがたいことになる。

第七章「法会・神事と土師器」では、法会・神事に関する文献史料を収集・分析し、宗教儀礼における土師器の用法を検討した。宗教との関連で、白色の土師器を清浄性や宗教性の反映とする解釈があったが、白色土師器を宗教的理由で重視したり選択的に使用したことを示す史料はない。法会・神事における土師器の用法を整理すると、法具の台や灯明皿に使用しており、饗宴で多法量の土師器を使用したのとは対照的に、法会や神事では、伝統的に大小2法量しかなかったことがわかる。

第八章「生活のなかの土師器」では、日常生活における土師器の用例を検討し、第Ⅱ部を総括した。中世土師器の用途はきわめて多様で、従来のように特定の用途を強調するのではなく、用途の広がりを見きわめる必要があること、こうした多様性が収束するのは近世以降であると結論づけた。また、日常の道具か非日常的な儀器かという従来の議論に対し、このような二項対立的な観点で中世の生活文化を論ずること自体に無理があり、その姿勢は先験的に認められた社会階層が文化相を規定する観点に立脚していると批判した上で、土師器の用途の広がりを中心とした視座の重要性を強調した。

第Ⅲ部第九～十六章では、中世土師器の全国的な解明をめざした。土師器は地域色が強く、それが全国的な視野による検討を困難にしてきた。しかし、京都系土師器の分析は、その克服を可能にする。京都系土師器が中世前期（12～13世紀）と後期（15～16世紀）の2時期に出現する事実は、以前から指摘されてきた。この現象は、各地で京都の文化に対して特別の価値を与える動きが生じたことを示し、土師器の消費に関する重要な問題を提起する。しかし、その価値の受容が京都産土師器の流通ではなく、各地の模倣生産によって実現した事実は、製品に関する情報の受容法という生産上の問題に直結する。京都系土師器は、生産と消費に関わる論点を同時に提供し、かつ全国的な視点での検討を可能にする。

この視点を推進する上で、模倣対象についての情報が欠かせない。第九章「〈規範〉としての京都産土師器」では、京都産土師器の分類・編年・製作技術に関して、既往の年代観を修正しつつ整理した。次に、第十章「中世土師器生産の展開」

では、京都系土師器の展開を中心に、全国各地の中世土師器の様相を概観した。京都系土師器が出現したか否か、出現した場合は在地の伝統的土師器との間に技術交流があったか否かなどに注目して、旧国単位で各地の様相を整理した。中世前期においては、大半の地域でロクロ成形の土師器だけが生産・消費されていたが、近畿地方北部を中心に北陸地方や東海地方の一部（美濃・尾張北部）では京都系土師器が広範囲に分布し、東日本では平泉・鎌倉・伊豆（韮山・三島）、西日本では伯耆の一部（倉吉市域）で局地的に生産・消費されていた。中世後期においても、ロクロ成形土師器が全国的に分布するが、北陸・近畿・山陰（出雲以東）地方、美濃・豊後地域、山口・小田原などで京都系土師器が生産・消費されていた。

第十一章「京都と東国：中世前期における土師器生産の一餉」では、12世紀後半から13世紀の東日本で局地的にみられる京都系土師器を比較検討した。平泉・鎌倉・伊豆（韮山・三島）の三地域で大量に出土する京都系土師器は、従来、土師器の製作技術ないし工人が、京都から平泉を経て、鎌倉・伊豆へと伝播ないし移動した結果と理解されていた。しかし、三地域の京都系土師器を比較し、それぞれの展開過程を検討すると、各地域が独自に京都産土師器を模倣しており、三地域間での工人の移動を示唆する影響関係は認められないことが判明した。

第十二章「領国支配と土師器」では、大名家の城館や寺院に集中して京都系土師器が出土し、大名家の滅亡とともに京都系土師器も消滅する山口・小田原を取り上げた。大内氏や後北条氏の強い関与のもと、伝統的土師器生産を一掃するかたちで生産が始っしはじめたことが共通点として強調されてきたが、山口においては細部形態や法量分化に至るまで、京都産土師器を正確に模倣したのに対し、小田原では伝統的な2、3法量の枠内で、ナデ調整など視覚的に把握しやすい特徴のみを模倣しており、模倣生産の実態が大きく異なっていた事実を明らかにした。

第十三章「京都系土師器の〈在地的〉変容」では、16世紀後半に京都系土師器が出現し、以後も継続して展開する豊後地域を取り上げた。中枢となる府内地域と豊後各地の京都系土師器の分布や出土状況を比較すると、当初、京都系土師器は府内地域のみで生産されていたと推定できる。江戸時代になると豊後竹田（岡城）でも京都系土師器を生産するが、それは16世紀後半の京都系土師器を祖型としており、同時代の京都産土師器の形態や製作技術はまったく意識されていなかった。すなわち、17世紀以降の豊後地域における京都系土師器は、模倣生産という当初方針とは離れて、独自の変容を遂げて定着したのである。これは豊後地域の土師器生産の特徴と言える。

第十四章「土師器生産の二極構造」では、15～16世紀における近畿地方の様相を検討した。京都系土師器は近畿北部で受容されるが、他地域と異なり、中世を通じて京都産土師器の製作技術の影響を受け、かつ遺跡の性格に関わりなく出土する。京都系土師器が普遍的に出土する事実は、その出現を武家儀礼の伝播・模倣と関連づける消費者側の論理だけでは説明できない。生産者の論理も加味して、歴史的背景を考察する必要がある。

第十五章「〈手づくね土師器文化圏〉の中心と周縁」では、宇治市内遺跡群（山城）、白山平泉寺遺跡（越前）、東氏館跡（美濃）の三遺跡を取り上げて、それぞれの土師器編年案を提示し、京都からの地理的距離と土師器の類似性との相関を考察した。京都と隣接するにもかかわらず、宇治の京都系土師器の変遷は京都産土師器と一致せず、いったん受容した形態的特徴や製作技術を長く保持する傾向がある。一方、白山平泉寺遺跡では、12世紀と16世紀に京都系土師器を生産したが、13～14世紀頃には赤色・白色という色調差のみを模倣していた。また、東氏館跡では、12世紀頃に受容した京都産土師器の製作技術を独自にアレンジして保持する一方で、京都産土師器も搬入していた。以上の三遺跡は、中世を通じて手づくね成形技術を保持した点で京都に似ているが、京都産土師器の形態・技術情報が領有される過程は、京都との地理的距離に制約されるものではない。

第十六章「京都系土師器生産の成立と終焉」では、第Ⅲ部のまとめとして、価値形成という視点で総括した。すなわち、各地における京都系土師器の生産は、京都を中心とする一元的価値体系が広範に受容されたことを意味するが、模倣生産の実態は各地によって大きく異なり、とくに精巧な模倣品を志向したわけでもない。概して、京都産土師器に関する不完全な形態・技術情報をもとに生産した、不完全な模倣品を使用したものであり、そこから生まれた多様性を直視せねばならない。また、京都系土師器生産は、ほとんどの地域で一世紀程度しか継続せず、京都産土師器の形態・技術を模倣することは、おもに導入時だけに意識されて、以後、存続過程において、伝統的な在地の土師器の器形に回帰する事例も多い。土師器を使う生活上の実践を「文化」とするなら、京都「文化」という本来の文脈から切り離されて扶植された京都系土師器とは、在地「文化」から見れば異質なものでしかなかった。在地の先行土師器にはない「京風」という新たな価値をまもって出現し

たことは事実としても、それは決して地方「文化」を超越し、変質させるほどの力を持っていなかったのである。

終章「中世土師器の使用と生産」では、本論文の成果を再確認するとともに、残された問題点や展望を整理した。中世土師器の生産・消費のいずれの面においても、一言では言い尽くせない多様性があり、その一端を明らかにしたことが本論文の成果の一つである。中世土師器をめぐる従来の議論においては、とかく単一的な意義や価値観が強調されてきたが、それはあくまでも多様な特質の一つでしかない。本論文は、生産者と消費者という二つの観点から考察することで、ある程度の成果を修めたが、今後も個々の具体的事例に則して、意義や価値の解明を積み重ねることが重要と考える。

論文審査の結果の要旨

約900基の墓穴から出土した土器を分析して、エジプト先王朝（Pre-Dynasty）時代の年代基準を示したイギリス人考古学者ペトリ（Flinders Petrie）は、「どんな土地でも、土器は考古学のイロハである（“Pottery constitutes the essential alphabet of Archaeology in every land”）」と喝破した。壊れやすく、時代の流行を鋭敏に反映する土器は、年代、文化圏、生産と流通など、考古学的分析における基準資料である。しかし、土器の種類によって、分析の視点は異なる。エジプト先王朝期の土器が、限られた地域の詳細な年代基準となったのに対し、古代地中海沿岸や西ヨーロッパに広く分布するギリシャ陶器やローマ陶器は、異なる地域間の同時代性を確認し、流通史・交易史・商業史を分析する鍵となった。

日本中世土器の研究においても、広範な交易対象である輸入陶磁器や備前・常滑などのいわゆる「中世六古窯」の製品が、異なる地域間の同時代性や流通史・商業史を解明する鍵となったのに対し、日本各地で局地的に生産され、小地域内で自己完結的に消費された土師器は、各地の詳細な年代基準となっても、これを全国的視野で社会史・経済史のなかで位置づける試みは大幅に遅れた。小地域内で生産と流通が完結する土師器を、視野を広げて比較検討することに歴史的意義を見いだしがたかったからである。

論者は中世文化の憧憬だった京都で生産され、流通した京都産土師器を模倣した手づくねによる土師器が、ロクロ成形の土師器が一般化していた日本各地で生産・消費された事実に着目し、これを京都系土師器と呼んで、その技術や形態が各地に伝播・定着し、展開した過程を詳細に跡づけることで、中世土師器に関する新たな分析視角と知見を提示した。とくに、中世前期の平泉や鎌倉で大量に出土した「手づくねかわらけ」が、古代都市の饗宴に遡源する「都市的」「儀礼」的なもので、それが日本各地で広く普及した点を「中世的」とする通説に対し、各地における京都系土師器がきわめて多様である事実を具体的に示して、中世土師器についての一面的な理解を乗り越えることに成功した。考古資料だけでなく文献史料をも駆使した第Ⅰ・Ⅱ部における資料操作や論法は、きわめて周到である。

すなわち、同時代史料から出土土師器の器名を考証し（第三章）、献盃儀礼の実態を故実書および京都産土師器の形態・法量・技術からモデル化する。京都産土師器は15～16世紀前半には6法量以上に多様化しており、故実書にみる酒宴のあり方とよく対応する。ところが、日本各地の戦国大名が採用した献盃儀礼においては、身分差の表象に直結する所作や座位が儀礼の規範として受容されても、各地で出土した京都系土師器の法量は、周防大内氏などごく一部の例外はあるが、京都産土師器ほどは多様化しておらず、室町幕府の故実通りに道具は再現されていない（第六章）。京都産土師器の形態・技術情報をどこまで模倣するかは、各地の京都系土師器の生産者や消費者の嗜好に任されていたのである。

また、土師器の赤・白という色調に宗教性や清浄性を見だし、出産時に土師器を破碎する習俗などから、中世土師器に非日常的な「儀器」としての性格を与える論に対しても、文献史料をもとに厳しく批判し、「日常」／「非日常」という二者択一的な認識では、中世土師器のもつ多様な機能・用途は解明できないことを強調する（第八章）。中世土師器は、日常的な飲食器、宴会・法会・神事などの道具、呪術的な機能など、さまざまな用途があった。考古資料から判断すると、京都近郊では、中世末、近世初にいたって、土師器は飲食器としての主要な機能を国産陶磁器に譲り、灯明皿など特殊な機能・用途に収斂する。しかし、それ以前には、各地域でさまざまな中世土師器の世界が展開していたのである。

その多様な中世土師器の世界を、北海道から九州にいたる全国を視野に入れて、考古資料から地域ごとに具体的に検討したのが第Ⅲ部である。まず、基準となる12世紀～16世紀における京都産土師器の編年を再検討する（第九章）。これと対照しつつ、京都系土師器が各地で出現した中世前期（12～13世紀）と中世後期（15～16世紀）を中心に、在地的なロクロ成形土師器（Ⅰ群土師器）、京都産土師器を模倣した手づくね土師器（京都系土師器）、京都系土師器が在地化したⅡ群土師器が、

それぞれどのように展開したのか、ほぼ旧国を単位として概観する（第十章）。この検討を踏まえて、中世前期に京都系土師器が顕著に展開した奥州平泉、相模鎌倉、伊豆韭山・三島の三地域の比較（第十一章）、中世後期に京都系土師器が顕著に展開した周防大内氏関連遺跡（山口）と相模後北条氏の城下町小田原の比較（第十二章）、16世紀後半に京都系土師器が出現し独自の変容を遂げた豊後地域の検討（第十三章）、中世を通じて京都産土師器の製作技術の影響を受け、遺跡の性格に関わりなくそれが出土する近畿地方の検討（第十四章）などのケース・スタディによって、全国の中世土師器にみる多様な具体像の歴史的背景を解明した。そこでは、土師器のような生活史的考古資料を、武家儀礼の伝播など政治史的動向と安易に結びつけず、領主層と土師器工人との関係や、生産者の動向、消費者の要請など、一貫して土師器の生産と流通、消費を担った基層部分に目が注がれている。

論者は、第Ⅲ部を「モノ情報」の拡散と受容者側の価値観から総括する（第十六章）。各地における京都系土師器生産は、京都を中心とする一元的価値体系が広範に受容されたことを意味するが、模倣生産の実態は各地によって大きく異なる。概して、京都産土師器に関する不完全な形態・技術情報をもとに生産した不完全な模倣品を使用しており、そこから生まれた多様性こそが中世土師器の特色であると論者は指摘する。京都系土師器生産は、ほとんどの地域で一世紀程度しか継続せず、京都産土師器の形態・技術を模倣することは、おもに導入時に意識され、以後存続過程において、伝統的な在地の土師器の器形に回帰することが多い。土師器を使う生活上の実践が「文化」なら、京都「文化」という文脈から切り離されて移植された京都系土師器は、在地「文化」から見れば異質なものであった。「京風」という新たな価値をまもって出現したとしても、それは地方「文化」を超越し、変質させるほどの力は持っていなかったというのが論者の主張である。

以上、日本全国一千カ所以上の遺跡で出土した中世土師器を資料としながら、論者の分析視角や論理は一貫しており、ケース・スタディとして選んだ資料も、自らの文脈の中で見事な整合性をもっている。器名考証などに用いた文献史料は膨大量にわたるが、その史料操作に破綻はない。ただし、論理的な一貫性を持たせるための基本的概念となった、京都で生産された京都産の手づくね土師器、在地のロクロ成形土師器（Ⅰ群土師器）、京都産土師器を模倣した京都系土師器、手づくねという技法は同じでも京都産土師器と形態が異なるⅡ群土師器の呼称のうち、とくに京都系土師器とⅡ群土師器の区別は、実際に各地の土師器変遷を検討し、京都系土師器が在地化してⅡ群土師器に転化する事実が明らかになるにつれて、有名無実化している。事実を解明するための武器とした概念が、事実の重みに耐えられなくなっているのだ。しかし、それは事実解明がそこまで進展したことを意味し、本論文の価値を大きく損なうものではない。また、論者は各地の京都系土師器が「都市的」「儀礼的」「非日常的」「清浄な儀器」であるとする通説的理解を一貫して批判しているが、そうした説の根拠となった平泉や鎌倉において完形品が一括で大量に出土する現象の意味を十分に説明していない。中世土師器の技術や形態を主題とした遺物論においては、論者の研究水準はぬきんでているが、その出土状況を類型化する遺構論がほとんど欠如しているのである。これは論者に与えられた次なる研究課題と言ってよいだろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年7月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。